

ワーズワスの人間愛

—「決意と独立」再考—

関 淳 子

要 旨

ロマンティズム (Romanticism) はイギリスにおいて19世紀初頭に栄えた文学思潮である。それは、P. B. シェリー (P. B. Shelley) の詩を借りて言えば、「ある人へ」(“To—”) で歌った「限りなきものにたいするあこがれ」である。ロマン派の作家たちは、感情、想像力を重視した。人間の尊厳を知識ではなく、感情に求めたのである。ウィリアム・ワーズワス (William Wordsworth) はイギリス・ロマン派のなかでも最大の詩人である。ワーズワスは、1770年に、崇高な自然美にあふれたイギリス湖水地方に生まれ、1850年に亡くなるまで80年という当時では長い人生を生き、自然詩人と呼ばれるワーズワスは、自然を讃える詩を生涯創作した。しかしワーズワスの目指したことは自然に対する愛によって到達することができる人間の尊厳であった。

ワーズワスの詩的才能が最高潮に達した「偉大な10年」と呼ばれる時期(1797–1807)以後の作品は詩的評価が低いとされている。しかしワーズワスは生涯にわたって人生の苦悩、悲哀に打ちひしがれることなく生きる人間の尊厳を作品の中で歌い続けようとしたのである。本稿では「偉大な10年」の直後に創作された作品「決意と独立」(“Resolution and Independence”)を読むことによって自然に対する愛から人間への愛へと辿っていったワーズワスの心の変遷を考察したい。

キーワード：イギリス・ロマン派詩人、ウィリアム・ワーズワス、「決意と独立」、想像力、自然の愛から人間への愛へ

序

イギリス・ロマン派を代表する詩人ワーズワス (William Wordsworth, 1770–1850) は、「ティンタン寺院の数マイル上流で書かれた詩」(“Lines Composed a Few Miles above Tintern Abbey,” 1798) において「自然は自然を愛するものを決して裏切らない」(122–123) と自ら歌っているように、生涯自然に対する愛を貫徹した詩人であった。ワーズワスの代表的な作品は1797年から1807年までの時期「偉大な10年」(the great decade) に書かれ、それ以後の作品は詩的価値の乏しいものとされていることは、ギャロッド (H. M. Garrod) を始めとする先行研究によって指摘されている¹⁾。「決意と独立」(“Resolution and Independence”) は、ワーズワスが自らの詩的能力の衰退を自覚し始めた頃の作品として「霊魂不滅の頌」(“Ode: Intimations of Immortality from Recollections of Early Childhood,” 1807; 以後“Ode”と表す)²⁾と共に多くの批評家によって論じられている。「霊魂不滅の頌」はワーズワスの詩的能力の枯渇を暗示する

ものであるが、失われたものにたいする挽歌ではなく、新しい力を歓迎するものであることは代表的な批評家の1人である トリリング (Lionel Trilling) の見解である³⁾。その新しい力は、本稿で触れる「決意と独立」に登場する老人と関連していることから、この作品は詩人の精神過程を辿るうえで重要な作品である。1802年「蛭取り老人」(“The Leechgather”)として書き始められたこの作品は、1807年「決意と独立」として出版された。「決意と独立」の老人は、ブルーム (Halold Bloom) らがワーズワスの想像力の所産としてとらえ、老人は周囲の自然の一部となっていると指摘している⁴⁾。詩的能力の枯渇という危機にさらされながらも、ワーズワスは自然に対する想像力による神秘的な体験と同質の体験を老人との出会いに持つことができたのである。拙論、関西英米文学研究会『英文学手帖』27号「ワーズワス『決意と独立』に関する一察」においては、周囲の自然になかに融けこみ、不幸や苦悩を超脱し動物のような落ち着きをあたえられた老人という肉体的存在としての人間に対する、想像力に基づいた神秘的体験によって、詩人がどのように力づけられたかを中心に考察した⁵⁾。しかしワーズワスが主題としたのは『序曲』(The Prelude) 12巻で述べているように人間の外面ではなく人間のこころであった⁶⁾。本稿では、肉体的存在としての老人から、詩人の想像力によって、苦悩に打ちひしがれることなく自然への愛を保ち続け、有限の生を全うしようとしている一人の人間へと老人が高められていった次第を辿ってみたい。ワーズワスが晩年に至るまで自然への愛を失うことなく作品を書き続けようとした決意と、無意識な幼年時代の自然との交わりから精神的に独立して自然の愛から人間への愛へと向かっていくワーズワスの精神過程を再検討する。「決意と独立」を精読することによってワーズワスは生涯、作品によって人間の精神、人間愛を歌い続け、人間の魂を高めることを信念としていた詩人であったことを明らかにしたい。

1. 作品「決意と独立」での想像力

1800年10月付けのワーズワスの妹ドロシー (Dorothy) の日記にワーズワスが頭が足先につかばかりの背中が二重に折れ曲がった老人と出会ったことが書かれている⁷⁾。この老人は妻と消息のわからない1人を除く子供達に先立たれ、蛭取りを職業として生活していた。今では蛭は少なくなり、老いもともない、蛭を取る力もなくなろうとしていた。「決意と独立」は、この実際に出会った蛭取り老人を原型としている作品である。ワーズワスは作品の中で老人を詩人に決意と独立心を与えてくれる威厳に満ちた存在として高めたのであった。「決意と独立」の最終連は次のように述べられている。

第20連

じきに彼は他の事項を交えだした。

それは快活な口振りと、親切ではあるが

概して堂々たる態度だった。話が終わると
 弱々しい老人にこの不拔の心を見出して
 私は自分を笑いたい気になった。
 「神よ、しっかり私の支えになって下さい。
 私は淋しい沼地の蛭取りを思い出しましょう。」

ワーズワスは妻の妹サアラ・ハチンソン (Sara Hutchinson) にあてた手紙の中で、この老人との出会いについて「神が私に強い想像力を与えてくれたのだということを信じているにも拘わらず、この老人ほど印象的な姿を考えることはできなかった⁸⁾」と述べている。現実に出会った蛭取り老人が、詩人の心の中で、想像力によって浄化され、「私 (詩人) の内心の目」(“in my mind’s eye”) に浮かぶ姿となっていった。ワーズワスは「詩人の魂の成長」(“Growth of a Poet’s Mind”) と副題を付けた自叙伝『序曲』(*The Prelude*) で自らの想像力がどのように損なわれ、そして回復されたかを主要なテーマにしている。ワーズワスの詩的生命は想像力にあったと言える。蛭取り老人は、想像力によってどのようにして詩人に決意と独立心を与えてくれる存在となったのであろうか。

2. 静寂のうちに回想された情緒

「決意と独立」は、昨夜の嵐のような天候後の静かな朝の描写で始まる。

第1連

風は終夜吼えたけり
 大雨が滝のように降りそそいだ。
 しかしいま日は静かに、明るく昇っている。
 遠くの森で鳥がさえずっている。
 野鳩は自分のほれぼれする声に耳をすまし
 かささぎがおしゃべりをし、かけすが答えている。
 そして大気はこころよい水音に充ちている。

第2連

陽光を愛するものはみな戸外に出ている。
 空は朝の誕生を喜んでいいる。
 草は水滴をつけて光っている。一沼地には
 兎が嬉嬉としてかけまわっている。

彼は足で地面にしぶきをあげて
霧をたちのぼらせる。霧は日にきらめいて
兎の走り行くところ、どこにも一緒について回る。

日が静かに輝かしく昇り、小鳥達が遠くの森でさえずり、大気は快い水の音で満たされている。草は雨滴で輝き、沼地で兎が地面から霧を立ち上げ、その霧は兎が走るところどこでもついてくる。この光景は1795年に書き始められたとされている「廃屋」(“The Ruined Cottage”)での廃屋の周囲の光景を想起させる。

「廃屋」は、日が照り続ける夏の日、ベンチに腰かけている旅商人が語る廃屋の最後の住人であった薄幸の女性マーガレットの話である。マーガレットは、誠実に愛情深い女性で、機織り職人の夫と2人の子供と共に貧しいが幸せに暮らしていた。しかし2年間の凶作と戦争の勃発、夫の病気が重なった。生活苦から夫は妻に内緒で兵役に志願して、妻マーガレットに応募金を残して去ってしまう。マーガレットは、しだいに崩れ落ちていく家、荒れ果てていく庭で、子供も亡くなり、一人で夫の帰りを待ちわびながら、衰え、病で亡くなった。旅商人の語ったマーガレットの話聞いて悲しみに沈む詩人に、旅商人は次のように語るのである。

「友よ。あなたはもう十分悲しみました。分別はこれ以上悲しみを求めようとはしません。賢明に明るくなりなさい。もはや事物の姿をふさわしくない目で読むのはお止めなさい。彼女はいま穏やかな大地に眠っており、ここには平安があります。私はよく覚えています、かつて私がそのそばを通った時、あの波状の葉をもった草、あの雑草、あの壁の上の高い槍草が、霧と静かな雨滴に銀色に輝いて、私の心に非常に平静な静寂のイメージを伝えました。それは私の心に満ちていた不安な思いの中で、非常に穏やかで静かで、また非常に美しく見えたので、荒廃や変化から私達が感じる悲しみや絶望、存在の移ろいゆく姿が残していくあらゆる悲しみも、瞑想のあるところでは、生きることのできない空しい夢のように思われました。私は振り返って、幸福な気持ちで進んで行きました。⁹⁾」

老人は、マーガレットの庭の霧と静かな雨滴に輝く草がもたらす光景の中で、廃屋の薄幸の女性マーガレットの人生を回想した。マーガレットの家と庭の光景は老人の心に大変平静な「静寂のイメージ」(“So still an image of tranquility”)を与え、老人の「不安な思い」の中で、「非常に穏やかで静かで、また非常に美しく」見えた。「静寂のイメージ」のなかでマーガレットの話の回想したとき「荒廃や変化から私達が感じる悲しみや絶望、存在の移ろいゆく姿が残していくあらゆる悲しみ」も黙想のあるところ「空しい夢」のように思われたのだった。マーガレットの悲惨な人生も永遠のなかの一瞬のように思われた。

ワーズワスは『抒情民謡集序文』（“Preface to Lyrical Ballads,” 1801）で、「静寂のうちに回想された情緒」について次のように述べている。

私はさきに、詩は力強い感情が自然に溢れ出たものであるといった。詩は、静かに思い出された情緒から発生するものである。その情緒は、いつまでも瞑想していると、一種の反作用によって、その平静さをだんだんと失っていく。そして前に瞑想の対象となっていた情緒に類似したある情緒が、だんだんとできあがってきて、それ自身が実際に心の中に存在するようになる。成功した創作はこういう気分で一般に始められて、これに酷似した気分で続けられる¹⁰⁾。

マーガレットの不幸な生涯を思う老人の悲痛感は平静な「静寂のイメージ」の中であって思い起こされる時、想像力の働きによって、幸福感に変化したのであった。この感情は静寂のうちに回想された情緒である。詩人と蛭取り老人との出会いも雨滴で輝く草、兎が走るところについてくる霧という光景の中で静寂のうちに回想された情緒であると言えるだろう。ワーズワスの作品を解説するうえで、回想、時間による浄化作用は不可欠な特質であると思われる。

3. 蛭取り老人との出会い

蛭取り老人との出会いは次のようにしてもたらされたのだった。

第3連

そのとき私は沼地を旅していた。

私は嬉しげに走る兎を見た。

私は森と遠い流れの轟々たる音を聞いた。

それとも聞かなかった一少年のように心楽しく。

このころよい季節が私の心をみたした。

空しい、憂鬱な、人の世のあらゆる営みとともに

古い思い出は完全に忘れ去られた。

第3連では沼地の旅人であった詩人が喜びで走る兎を見て、森と遠い流れの轟きを聞いたことが過去形で語られる。この光景は第1連と第2連の朝の描写が連想され、前述したように回想場面に展開されていることが確認できる。その時詩人は少年のように楽しく快い季節に満たされていた。「靈魂不滅の頌」でも少年期の自然との交わりは季節（“the season”）（“Ode,” III, 26）として表現されている。自然の中で走る兎と同じく幸せな大地の子として、世間から離れ、

すべての苦勞から免れて暮らしていた。詩人のこの心境は「靈魂不滅の頌」では、幸せな動物達とともに自然の祝祭に加わっていた幼少年期の詩人の境地である。幼少年期の詩人は地上のあらゆる平凡な光景が「天上の光をまとい/夢の輝きと鮮かさに包まれて見えていた」(“Ode,” I, 3-5) と描写されている。

第4連からは、心楽しい気分から一変した心的変化が語られている。

第4連

しかし、よくあることだが
登りつめた極度の喜びから
喜びの達した高さだけ、それだけ深く
落胆の底に沈むことがある。
その朝の私がそれであった。
恐れ、妄想、漠たる悲哀、言い知れぬ盲目の思いが
ひしひしと私に押し寄せてきた。

第5連

私は空にさえずる雲雀の声をきき
遊びたわむれる兔を思った。
私もまた大地の幸福ないとし子で
これら幸福な生物と同じ生活をしている。
私は世間と一切の心勞を外にして歩んでいる。
しかし私にはまた別の日が訪れるかも知れぬ。
孤独と、心痛と、苦難と、貧困と。

第6連

私は人の世の営みが夏の気分であるかのよう
温情に富むおだやかな信仰の人には
必要な一切が求めずして得られるかのよう
楽しい思いで生涯を過ごして来た。
しかし自分自身のことをまるで構わぬ人間が
彼のため他人が築き、種をまき、請いに応じて
彼を愛することをどうして期待出来よう。

第7連

私ほかの驚くべき少年チャタトンを思った。
 誇りを抱いて斃れた、あの眠りを知らぬ魂を。
 また山腹に鋤をとって
 栄光と歓喜のうちに歩んだ人のことを。
 われらは自らの心によって聖なるものにされる。
 われら詩人は青春を歓喜のうちに始めるが
 やがて終わりには失意と狂気が見舞うのだ。

第4連では、詩人は今までの喜びに達した高さだけ深く落胆に沈むことになった次第が語られる。第5連では幸福な動物たちと同じように、世間から離れ楽しい思いで暮らしてきた幼少年期を思い、そのような日々が失われることを自覚し始めた詩人の心中が告白されている。第6連での「自分自身のことをまるで構わぬ人間」とは、自然の圧倒的な支配下にあり、完全に自然に依存した動物たちと同じ、すなわち幼児の無自覚な自然との交わりであると言えよう。そのような自然との交わりは成長するにつれ、失われることは「靈魂不滅の頌」で提出された嘆きでもある。しかし私達詩人は自分自身の精神によって、聖なるものにされねばならないのである。チャタトンを初めとする詩人達の青春も喜びで始まるが、やがて失意と狂気が訪れる。詩人はそのような詩人達の人生を思い陰鬱な思いに襲われたのであった。ここでの詩人達の失意の人生について、トリリングはワーズワスが「決意と独立」の執筆の直前に、失意に陥っていた詩人コールリッジ (S. T. Coleridge) に出会ったことを指摘しその関連に触れている¹¹⁾。詩人はこのような陰鬱な気分のなかにあって蛭取り老人に出会ったのであった。

心楽しい気分から反対に陰鬱な気分へ落ち込むという精神過程は『序曲』(*The Prelude*) 11巻の「時の流れの点」(“spots of time”) (*The Prelude*, Book 2, 258) と呼ばれている少年時代のワーズワスの自然との体験を想起させるものである。『序曲』では、詩人がフランス革命などの時代風潮による精神的墮落から、惰性を振り落して再び大自然の面前に立つことができたのは、人の命を甦らせてくれる「時の流れの点」となった自然との体験を回想することによってであったと述べている。蛭取り老人との出会いも、詩人にとって「時の流れの点」と同質の体験であったと思われる。

「時の流れの点」の1つは、詩人が6歳の頃、従僕のジェイムスと共に胸をときめかせて馬の背にまたがり山路を昇って行った時の体験である。しかし詩人はすぐジェイムスとはぐれる。詩人は突然不安に襲われ馬を降りて、石ころだらけの沼地へと馬を向かい引いて行き、昔死刑場のあった場所に出てきた。近くの芝地には殺人を犯した人の名前が刻まれていた。詩人はその場を離れ、共有地に登った。その時見た光景、むき出しの池、小高い丘の上ののろし台、そして吹きつける強風に着物を吹き上げられて当惑している一人の乙女を見た。詩人は、「あ

の幻影のようなもの寂しさを描こうとすれば、人間にはまだ知らされていない様々な色どりや言葉などが、きっと必要になってくることだろう。」(*The Prelude*, Book 2, 309-311)と語っている。このような体験は「人間の精神が主人公となっていて外面的な知覚は、精神の意志にきわめて従順な従僕にすぎないことを深い感動を持って体験できる」(*The Prelude*, Book 2, 270-271), すなわち詩人の想像力によってもたらされたものである。ワーズワスがこのような体験を持つことができたのは、心楽しい気分から一変した極度の不安と緊張を自然との一体感のなかで解消することができたときであった。幸せな動物達とともに自然の祝祭に加わっていた幼少年期の詩人の境地ではない。自然の中で走る兎と同じ幸せな大地の子としての無自覚な自然との交わりではない。自然の圧倒的な支配下、自然に対する依存から精神的に独立した人間の精神から生み出された、想像力の働きに基づいたものであったと言えよう。

蛭取り老人との出会いは次のように描写されている。

第8連

さて、それは格別の恩寵によるのか
 天の導きか、何かの賜ものか
 いずれにせよ、この淋しい場所で
 このようないやな考えと闘っていたとき
 しんとして日を浴びているある池のほとりで
 ふと目のまえに1人の男を見た。
 それは白髪の、途方もなく年老いた人のように見えた。

この老人との出会いの場面は前述した「時の流れの点」でのむき出しの池をはじめとする光景との類似がみられる。同じ場所でありながら第3連までの光景の描写とは一変している。沼野の池は日を浴びてはいるが淋しい場所で、詩人は蛭取り老人と遭遇することになった。いやな考えと闘っていた詩人にとってこの老人との出会いは「格別の恩寵」「天の導き」「何かの賜もの」のように思われた。

「格別の恩寵」「天の導き」「何かの賜もの」という別の世界からの啓示のようであった蛭取り老人との遭遇は、拙論¹²⁾で触れたように『序曲』7巻のロンドンでの盲目の乞食との出会いを思い出させる。ロンドンの群集は「どこか静かな山の上を、音もなく、すうっと通って行く、まるで夢の中に出現する一種の行列」(*The Prelude*, Book 7, 601-602)となった。群集の中の人間は生命を奪われた存在となり、見世物として距離おかれている。日常生活に安定を与えてくれる一切のものが遠ざかり、陰鬱な気分になり落ちてこんで茫然となっていたとき、1人の盲目の乞食に出会う。

仰向いて、壁によりかかっていたが、胸に
 何やら、文字の記してある紙切れをつけて、
 その男の履歴と、何者であるかが説明してあった。
 この見るも哀れな光景に、私の心は、瞬間、
 なにか波立つ水の力にでも突き当たったかのように、くらくらとした。
 そして、このラベルのうちにこそ、我々自身と同時に
 全宇宙のうちで、われわれの知りうる最高のものの、
 象徴があり、しるしがあるのだと、直感した。
 そうして、この不動の男の姿、その眉ひとつ動かない顔、
 視力を失った両眼、それらを私は、まるで別の世界から
 何か警告されてでもいるかのように、じっと見据えていた。
 (*The Prelude*, Book 7, 611-622)

盲目の乞食の不動の姿は、「別の世界から何か警告されている」存在にまで高められたのであった。これは、「格別の恩寵」「天の導き」「何かの賜もの」として「適切ないましめのことばで私を力づけるためどこか遠いところからよこされた人」である蛭取り老人を想起させるものである。このように詩人は自らの心の中で、想像力によって老いさらばえた蛭取り老人も力を与えてくれる神のような存在にまで高めたのである。

4. 蛭取り老人との交わり

蛭取り老人の姿は、次のように描写されている。

第9連

むき出しの山嶺に
 巨大な石がうずくまって
 どのようにして、どこからそこに来たかと
 見る者のすべてに不審をいだかれることがある。
 それは五官を具えたもののように見えるのだ。
 日を浴びるため、のこのこ這いだして
 張り出た岩や砂の上に休んでいる海獣のように。

第10連

そのようにこの人は見えた。あまりにも年老いて

生きているとも死んでいるとも眠るともつかず。
 彼のからだは二重にまがり、足と頭は
 長い遍歴の末に相合おうとしていた。
 あたかも、苦痛のおそろしい重圧か
 遠い昔にうけた病気の猛威が
 人間に耐え得ない重みを彼の体格に加えたかのように。

ワーズワスは「1815年詩集」序文（“Preface to the Edition of 1815”）で、この箇所を引用して次のように説明している。

これらの心象には、直接的に、或いは間接的に働きかける想像力の、与え奪い修飾する能力が総動員されている。石は海がめに似せられて生命力のようなものを与えられ、海がめは、石に似せられて、生命的特質を奪われている。この海がめという中間的心象は、石という本来の心象を老人の姿や状態に、よりよく類似させる目的で使われており、老人の方は、生命や動きを奪われていて、石と海がめとの比較から、うまく導かれる一点にしばられている¹³⁾。

「与え奪い修飾する能力」という想像力の働きについては、『序曲』第13巻でのスノードン登山での体験で説明されている。ワーズワスは、1791年の夏の夜、友人とスノードン登山をした。厚く霧がたち込めていたが、月の閃光が降り注いだ時、足もとに横たわる霧の海の裂け目に想像力が宿ることを直感した。想像力は「事物の形態をつくり上げ、/付け加えたり、引き抜いたり、結合したりし、/あるいは突如、異常な影響力を及ぼすことによって、」（*The Prelude*, Book 13, 79–80）ヴィジョン（vision）の瞬間を与えてくれるのである。

蛭取り老人は、人間でありながら、石という自然のなかの一つの物体であると同時に海がめという生命をもつた「心象」として描写されている。これは『序曲』1巻で語られている少年時代の詩人の体験を思い起こさせる。詩人は帰省中の夏休みの夕方、湖にあったボートを無断で漕ぎ出し、周りの山々のこだまを聞きながら進む。詩人は、盗みの行為、後ろめたい気持ちを抱いていた。8連で蛭取り老人と出会う前に詩人が闘っていた「いやな考え」ではないが、罪の意識が伺える。月の光に輝く水面を岩山の頂上に向かって漕ぎ進めたとき、岩山の頂上の背後からもう一つの巨大な断崖が、まるで意志を持っているかのようにたち上がって来た。その時、彼の気持ちは恐怖に変わった。詩人はもとの漕ぎ始めた場所に戻ったが、その時の光景を、「いまだに知らなかったものの存在」（*The Prelude*, Book 1, 419）であったと述べている。その後、詩人の精神には、一つの暗がりのようなものができた。巨大な断崖は詩人にとって、「樹木とか海とか/空とかの、ふだん見慣れたものの形とも違い、野原の緑の色もなく、/およ

そ生きている人間の姿とも似ても似つかない、/ただ力強く、巨大なもの影」(*The Prelude*, Book 1, 421-425)となり、詩人に迫ってくるように思えた。巨大な断崖は自然のなかの一つの物体であると同時に、生命力のようなものを与えられ生きている人間の姿を連想させるものとなった。年老いて生きているとも死んでいるとも眠るともつかない蛭取り老人との出会いも、詩人が夏休みに体験した自然と交わりと同質の想像力によってもたらされた神秘的な体験であったと言えよう。

「靈魂不滅の頌」の主題は、幼年期の自然との交わりの中での大地を包んでいた「天上の光」の喪失の代償として「五官と外界の事物に対する/執拗な疑問のため/喪失と消失の感じのため」(“Ode,” IV, 145-147)に感謝と祈りを捧げ、自然のより習慣的な支配の下に生きることであった。この体験についてワーズワスはイサベラ・フェンウィック (Isabella Fenwick) に送った手紙の中で次のように述べている。

私はしばしば外界の事物が外的存在をもつと考えることができなかった。私を見るすべてのものと、私自身の非物質的なものから離れたものとしてではなく、その中に内在するものとして交わった。私は登校の途中何度もこの唯心論的深淵から自分自身を現実呼び戻すために壁や木につかまった。当時私はこのような精神過程を怖れた¹⁴⁾。

「感覚の光が、/突如、閃光とともに消え去り、そこに/目に見えなかった世界が、我々に開示される。」(*The Prelude*, Book 6, 532-534) 蛭取り老人の姿から今までの苦悩や病気は伺われたが、蛭取り老人の肉体的存在は感覚の光とともに消滅され、生きているとも死んでいるともつかない石や海獣というヴィジョンになった。詩人の精神は老人と想像力によって交わり、外界の事物である老人の姿は、外的存在をもつことができなくなった。石、海獣という「心象」となった老人は詩人の精神のなかに内在するものとなった。

5. 蛭取り老人との会話

このような蛭取り老人に、詩人は現実の人間のように近づき挨拶を始めるのである。

第11連

彼は木を削った長い灰色の杖で

自分の手足と、胴体と、青い顔をささえていた。

そして私がゆるやかな足どりで近づく間も

沼地の水溜りといった小池のほとりに

この老人はじっと立っていた。
風が吹きすさんでも耳をかさず
いざ動けば一団となって動く雲のように。

第12連

やがて老人は身を動かして
杖で池をかき廻した。そして泥水を
まるで書物でも読むように
つくづくと見つめた。
そのとき私はぶしつけながら
彼のかたわらに近づいて、こう言った。
「今日はいい天気になりそうですね」と。

第13連

その老人はゆっくりと、丁寧な言葉遣いで
おだやかに答えた。
私は言葉をついだ。
「一体どんな仕事をしておいでです。
貴方には淋しすぎる場所のようだが。」
答えるに先きだって、まだ輝きを失わぬ黒々とした眼に
軽い驚きのひらめきが見られた。

第14連

言葉は貧弱な胸から弱々しくもれて出た。
しかしどこか気高い声音によそわれて
一言一言が荘重なつながりでつづき
常人の及ばぬ洗練された語句と
節度ある言い回しだった。堂々たる言葉だ。
神と人にまことをつくす信仰の人
スコットランドの敵かな民の用いるような言葉だった。

第15連

彼は言った、年老いて貧しいので
蛭を採るため、この池に来たのですと。

危険で根気のいる仕事だった。
 彼はさまざまな困難を忍ばねばならなかった。
 神の恵みで、その時まかせに宿をとりながら
 池から池、沼から沼へ、彼はさまよい歩いた。
 こうして彼は正直一途の暮らしをつづけて来た。

第16連

その老人は私の傍に立って語りつづけた。
 だがやがてその声は私に殆ど聞きとれない
 流れの音のようになり、一語一語のけじめもつかなくなった。
 そしてこの老人のからだ全体が
 いつか夢で見た人のように思えて来た。
 または、適切ないましめの言葉で私を力づけるため
 どこか遠いところからよこされた人のように。

このような灰色の杖で支えている老人の姿は、『逍遙』(*The Excursion*)に登場する旅商人の姿を思い起させる。『逍遙』は、1814年に出版されたワーズワスの後期の長編詩であり、ワーズワス自身の姿が、旅商人と孤独者に投影されている。失意に陥る孤独者を旅商人が説得する形式になっていて、ワーズワスが自分自身の精神的苦悩をどのようにして超克しようとしたかを伺うことができる作品でもある。失意に陥っている詩人を力づけるためよこされた杖で支えている蛭取り老人は、後に旅商人の姿となっていたとも思われる。

「今日はいい天気になりそうですね」と語りかける詩人に老人は、「ゆっくりと、丁寧な言葉遣いで、おだやかに答えた」と述べられているが、どのように答えたのか触れられていない。詩人は、多くの困難を不屈の精神で耐え忍び沼野から離れることなく、蛭取りによって生計を立てている蛭取り老人の話に感銘を受けた。老人の語る言葉は、「スコットランドの厳かな民の用いるような言葉」と述べられているが、老人が直接語った形式にはなっていない。聞き手である詩人が老人に代わって間接話法で語っているのである。その声は流れの音のようになり、老人の姿も実存しているが外的存在を消失して、夢で見た人のように詩人の心の中に入っていつている。これは、自然との交わりと同質の神秘的な体験とみなされる。想像力によって造り出された蛭取り老人の発する言葉は、詩的能力の衰退、想像力の枯渇に不安を覚えるワーズワスが自分自身を励ましている言葉であると言えよう。

「回顧—自然への愛から人間愛」(“Retrospect — Love of Nature Leading to Love of Mankind”)と副題が付けられた『序曲』8巻では、詩人の人間への愛は、自然に負っていること、自然の恵みと導きによって人間を愛することを教えられたのだと語っている。霧の裂け目から現れ

た、自然の中に融合した羊飼いは夢のように淡く、美しい浮島の住人のように姿を現す。拙論¹⁵⁾で述べたように、羊飼いは外面的には人間の姿をしているが、詩人は自然のなかの一つの物体としてとらえている。羊飼いとのはわりは想像力によってもたらされた自然に対する神秘的な体験と同じであった。目に見える自然の事物の中に融合している羊飼いは、詩人の想像力によって浄化されたヴィジョンとなり、外面的に高貴な存在となっていた。詩人の想像力は自然に向けられた時と同じように一定の距離をおいて羊飼いに向けられた。現実の羊飼いと直接接することもなかったが、貧しい田園に住む人々の生活のなかに真理を求めようとしたワーズワスにとって、自然にもっとも近い存在である羊飼いは、外面的だけでなく内面的にも理想化された詩人を力づける人間でなければならなかったのである。沼野の淋しい自然のなかに融合し、老いても沼野を離れることもなく蛭取りの仕事を続ける蛭取り老人は、羊飼いの姿が原型となっていると思われる。

6. 詩人の内心の眼に存在する蛭取り老人

詩人の想像力によって造りだされた蛭取り老人の姿は、老人を取り巻く光景と言葉ともに詩人の内心の眼に消えることなく存在するものとなった。

第17連

私に先きの考えが戻ってきた。
命も縮む恐れ、叶いそうもない望み
寒さ、苦痛、労苦、その他あらゆる肉体の苦しみ
みじめな死をとげた偉大な詩人達。
一困惑して、なぐさめをさがし求めながら
私はまたしても熱心にたずねるのだった。
「何をして暮らしていますか、お仕事は」と。

第18連

老人はほほえみながら繰り返すのだった
蛭をさがして、所々方々を旅するのですと
彼の足もとの、蛭のいる池を
しきりとかき回しながら。
「もとはどこでも見つかったものですが
長い間においおい少なくなって来ました。
でもあきらめず、捜しあるいてとっているのです。」

第19連

彼がこのように話していると、淋しい場所と
 老人の姿と、言葉と、すべてが私を悩ました。
 私の内心の眼に、彼がしょっちゅう
 退屈な沼のあたりを
 黙々とひとり歩いている姿が浮かんできた。
 私がこのような思いにふけている間に
 彼はちょっと間を置いて、また同じ話を繰り返した。

第20連

じきに彼は他の事柄を交えだした。
 それは快活な口振りと、親切ではあるが
 概して堂々たる態度だった。話が終わると、
 弱々しい老人にこの不拔の心を見出して
 私は自分を笑いたい気になった。
 「神よ、しっかり私の支えになってください。
 私は淋しい沼地の蛭取りを思い出しましょう。」(序での引用と同じ)

ふたたび陰鬱な気分になり落ち込み始めた詩人に蛭取り老人は快活な口振り、親切ではあるが概して堂々とした態度で、前述した詩人が老人に代わって語っていた間接話法ではなく、老人自身の言葉で、蛭取りという仕事に対する思いを述べる。流れの音のようになった言葉ではなく、老人自身の力づよい言葉は、詩人自身に力強く生きる決意を固めさせるものとなっていった。「靈魂不滅の頌」では詩人は喜びの歌を歌う小鳥達、小太鼓にあわせてはねまわる子羊のなかで、自分のみ悲しみが訪れたことを述べた後、「折を得た発言」(“A timely utterance”) (“Ode,” III, 23) によって再び強くなったこと、悲しみから救われたことを示唆している。「折を得た発言」が何を指しているかに関しては、いままで多くの研究者がさまざまな意見を述べている。トリリングは、「決意と独立」の詩が、「折を得た発言」であると指摘している¹⁶⁾。トリリングの指摘のみに限定することはできないにしても、老人の言葉は、詩的能力の衰退を自覚し始め困惑して、なぐさめをさがし求めていた詩人の心の中で勇気を与えてくれるものとなったのである。

「靈魂不滅の頌」ではワーズワスはプラトンの靈魂不滅という観念を採用した。幼児は天国が身近にあるので、自然との一体感を感じることができ、太陽が東から昇って西に沈むように、成長するにつれ牢獄の影が閉ざし始める。しかしかつて他の場所に存在した生命の星である靈魂は故郷である天国を完全に忘れたのではない、栄光の雲をもすそにひいている少年

はその光と、その光の源泉を見ることができる。自然の司祭である少年はまだすばらしいヴィジョンの瞬間を持つことができるのである。「靈魂不滅の頌」では、幼少年時代の無意識の喜びに満ちた自然との交わりは消失しても、燃えさしのうちになお生きているものがあることを喜び、詩人が感謝と賛美の歌を捧げるのは、前述した「五官と外界の事物に対する / 執拗な疑問のため / 喪失と消失の感じのため」であると歌っている。これはかつて存在した「天上の光をまとい / 夢の輝きと鮮やかさにつつまれて見える」自然の光景ではなく、少年が想像力によって得るヴィジョンの瞬間であった。しかし「決意と独立」第17連では、詩人は再び現実に引き戻され、「命も縮む恐れ、叶いそうもない望み、 / 寒さ、苦痛、労苦、その他あらゆる肉体の苦しみ / みじめな死をとげた偉大な詩人達」のことを思い陰鬱な気持ちに陥る。人生の苦悩を経てきた肉体をもった老人の姿が蘇るのであった。蛭取り老人を取り巻く光景、蛭取り老人の姿と言葉すべては、詩人を悩ました。ここでは老人は『序曲』8巻で、詩人を人間への愛に導いた自然の中の一つの物体であった羊飼いでなく、言葉を発する人間であった。これは感覚でとらえられた老人の姿に対する執拗な疑問に悩む詩人を思わせる。ジョナサン・ワーズワス (Jonathan Wordsworth) はこの箇所について、「まるで蛭採る人のしつこい肉体としての存在を押さえつけようという戦いがワーズワスに、彼なりの神話を創り出すエネルギーを与えているかのようである。蛭採る人は、その肉体的実在を失うことはできないが、永遠性を獲得している。彼に適わしい領域である別世界へと、石、海の獣、そして詩の前半に出てくる雲といった偉大な境界のイメージによって移動してしまう¹⁷⁾。」と述べている。外的存在との境界にいる老人は、その実在を執拗に疑がわれることによって、再び詩人の精神に内在するヴィジョンとなったのであると思われる。

「水仙」(“I Wandered Lonely as a Cloud”)はワーズワスの想像力の「静寂のうちに回想された情緒」の典型的な例であるとされている¹⁸⁾。詩人はひとりさまよっていた時に、大群の水仙に出会う。喜び踊る水仙の光景に孤独感を抱いていた詩人の心も陽気になった。そのことが後にどのような影響をもたらしたかは、その時気付かなかったが、その後思いに沈む時、水仙の光景は、内心の眼にひらめくようになって、詩人の心を喜びで満たしたのだった。水仙の光景は静寂のうちに回想されることによって、蘇ったのであった。水仙の光景は時間による浄化作用によって、いっそう詩人に喜びをもたらすものとなっていったのである。

蛭取り老人も陰鬱な気分には落ち込む折に、静寂のうちに回想されることによって詩人の内心の眼に消えることなく存在するものとなった。想像力によって得るヴィジョンに不安を解消させることができた体験を回想することによって、なんども繰り返し回想された結果喜びに変化できる心理的習慣によって、老人は詩人の心の支えとなる、快活な口振りや堂々とした態度を持つ老人に変貌したのである。そして静寂のなかで回想された老人は『序曲』8巻の羊飼いでなく、退屈な沼のあたりを、黙々とひとり歩いている人間になったのであった。

7. 結び

「靈魂不滅の頌」では「人間の苦悩から生まれ出る心和らぐ思い」（“Ode,” X, 186–187）に力を見出そうという決意を歌っている。こうしてワーズワスは人生の苦悩、悲哀を経た蛭取り老人に、悲劇的な人生を受け入れ打ちひしがれることなく堂々と生きつづける威厳に満ちた人間に、詩人として生きる決意と独立心を与えられた。「靈魂不滅の頌」は「われらの生きるよすがとなる人情のために / その優しさと、喜びと、恐れのために / わたしはどれ程ささやかな花からも / しばしば涙にあまる思いをそそられるのだ」（“Ode,” XI, 203–209）で結ばれている。つつましい花のように生き死んでいく蛭取り老人の姿は、時間を経て回想によって蘇ったとき、石と海獣、雲という心象でもあり、また有限の生を生きる人間でもあったのだ。ワーズワスは生涯自然への愛を貫徹することによって自然の愛から人間愛に導かれ、人間の尊厳を求め、作品を書き続けようとしたのである。「決意と独立」は、このようなワーズワスの詩人としての決意と独立心を明らかに歌っている。比較的詩的価値が低いとされている後期の作品には、人生の苦難、悲哀を受け入れた詩人の深い人間に対する愛、人生観が窺われる。「決意と独立」はそのようなワーズワスの心の変遷を辿るうえで、「靈魂不滅の頌」とともに重要な作品であると思われる。

注

本稿は関西英米文学研究会『英文学手帖』27号「ワーズワス『決意と独立』に関する一考察」（1989）、11頁～20頁を加筆修正したものである。

- 1) H.W. Garrod, *Wordsworth; Lectures and Essays* (New York: AMS Press, 1978), 131.
- 2) “Resolution and Independence” 及び “Ode: Intimations of Immortality from Recollections of Early Childhood” の引用は、*The Poetical Works of William Wordsworth*, ed. Ernest de Sélincourt and Helen Darbishire (Oxford: Clarendon, 1940–1949) による。Resolution and Independence” 及び “Ode: Intimations of Immortality from Recollections of Early Childhood” の和訳は「ワーズワス詩集」前川俊一訳、東京：弥生書房、1947年を参照した。
- 3) Lionel Trilling, *The Liberal Imagination* (New York: Anchor Books, 1953), 134.
- 4) Harold Bloom, *The Visionary Company* (New York: Cornell University Press, 1971), 168.
- 5) 関西英米文学研究会『英文学手帖』27号「ワーズワス『決意と独立』に関する一考察」（1989）、11頁～20頁。
- 6) *The Prelude* の引用は、William Wordsworth, *The Prelude, or Growth of a Poet's Mind*, ed. Ernest de Sélincourt, rev. Helen Darbishire (Oxford: Clarendon, 1959) の1805年版による。*The Prelude, or Growth of a Poet's Mind* の和訳は『ワーズワス・序曲』岡三郎訳、東京：国文社、1974年を参照した。
- 7) Dorothy Wordsworth, *Journal of Dorothy Wordsworth*, Vol. 1, ed. Ernest de Sélincourt (London: Macmillan, 1941), 632.
- 8) *The Letters of William and Dorothy Wordsworth, The Early Years. 1787–1805*, ed. Ernest de Sélincourt (Oxford: Clarendon, 1967), 366.
- 9) William Wordsworth, “The Ruined Cottage,” Addendum to MS. B, 118–134. *The Poetical Works of William Wordsworth*, Vol. 5, ed. Ernest de Sélincourt and Helen Darbishire (Oxford: Clarendon, 1940–1949), 403. “The Ruined Cottage” は1975年に書き始められ、その最初の草稿をMS.A, 1798年に書き写された草

稿をMS.Bと呼んでいる。引用した箇所はMS.Bの追稿として書かれたものである。

- 10) "Preface to Lyrical Ballad (1801)," *The Prose Works of William Wordsworth*, Vol. 1, ed. W.J. Owen and Jame Wortington Smyser (Oxford: Clarendon, 1974), 49. この箇所の和訳に関しては、『イギリス詩論集 (上)』岡地嶺訳, 東京: 中央大学出版部, 1980年を参照した。
- 11) Lionel Trilling, *The Liberal Imagination* (New York: Anchor Books, 1953), 134.
- 12) 「ワーズワスの人間愛—『序曲』七巻を中心として」, 『イギリスロマン派の世界』関西コールリッジ研究会編, 東京: 成美堂, 1982年。167頁～187頁。
- 13) "Preface to the Edition of 1815," *The Prose Works of William Wordsworth*, Vol. 3, ed. W.J. Owen and Jame Wortington Smyser (Oxford: Clarendon, 1974), 33. この箇所の和訳に関しては、『イギリス詩論集 (上)』岡地嶺訳, 東京: 中央大学出版部, 1980年を参照した。
- 14) *The Poetical Works of William Wordsworth*, Vol.4, ed. Ernest de Sélincourt and Helen Darbishire (Oxford: Clarendon, 1940-1949), 463.
- 15) 「ワーズワスの人間愛—『序曲』八巻における羊飼いを中心として」, 『主流』第43号 同志社大学英文学会, 1982年。60頁～77頁。
- 16) Lionel Trilling, *The Liberal Imagination* (New York: Anchor Books, 1953), 134.
- 17) Jonathan Wordsworth, *The Border of Vision*, 鈴木瑠璃子訳『ヴィジョンの境界』松伯社, 1992年。280頁。
- 18) 斉藤隆文「ワーズワスにおける回想の構造」, 『イギリス・ロマン派研究』第17号, イギリスロマン派学会, 1993年。62頁。

From Love of Nature to Love of Man:

A Reconsideration of Wordsworth's "Resolution and Independence"

Junko SEKI

Abstract

Romanticism is a movement in literature which developed in the early 19th century in England. To use P.B Shelley's phrase in "To--," "The devotion to something afar / from the sphere of our sorrow?" English Romantic poets emphasized emotion and imagination over classical reason and the intellect. English Romantic poets seek the dignity of man not in knowledge but in human emotion. William Wordsworth is one of the greatest English romantic poets of the 19th century. Wordsworth was born in 1770, in the Lake District of England, which is full of sublime natural beauty. Wordsworth lived a long life of 80 years. He wrote many poems celebrating the beauty of nature. As a matter of fact, Wordsworth thought human dignity could be achieved through the love of nature. Wordsworth's greatest poems date from 1797 to 1807. Following this period it has been said that Wordsworth wrote poems of little value. I, however, argue that Wordsworth searched for confidence and love of man throughout his life. This paper attempts to examine the transition of Wordsworth's mind from love of nature to love of man in his poem "Resolution and Independence."

Keywords: English Romantic Poets, William Wordsworth, "Resolution and Independence", Imagination, From Love of Nature to Love of Man